

前回の振り返り(各委員から出た意見)

(1)子どもの意見表明・参加について

- ハイティーン会議の様子を見学できるようにするなど、まずは小学生以下の子どもたちに、子ども会議のイメージが持てるような機会を設けるとよいのではないかな。
- 学校や地域にある既存の仕組みを活用したり、会議体を設置したりして、身近なところで子どもの意見を聴ける場にするのがよいのではないかな。
- 小学生が参加する会議体がないことから、まずは仕組みとして整備をし、その活用を工夫していくというような考えもあってよいのではないかな。
→ハイティーン会議は中野区で 20 年以上の歴史がある会議なので、そこを大切にする必要はありつつも、条例に基づく子ども会議というのであれば、小学生も参加できる仕組みが必要である。
- ハイティーン会議について、子どもが自分の意見がまちづくりに反映されていると感じられるようなものになるとよい。
- 会議のやり方についても、子どもが来たくなるような工夫や、意見が出しやすくなる工夫、また、普段から意見が出せるような環境整備がされているとよいのではないかな。

(2)推進計画及び子どもに関する取組の評価・検証について

- 子どもの権利の視点で評価・検証するということは要するに子どもの意見を聴く、子どもの視点から評価をするということであるが、具体的にどうするかということが大事になってくる。子どもの意見の聴取、大人との対話、その結果どうなったか、子どもの意見を反映し、それができなかったときには理由を説明し、事後がどうなったかをまた説明することが子どもの視点というときに必ず押さえなければいけないところであると思う。
- 評価・検証にあたっては、子どもへのヒアリング、子どもと直接関わる大人へのヒアリングを行うことも必要と考える。
→ヒアリングの対象について、大人の例示として教職員と施設職員などとなっているが、事業者もいれていただきたい。
→大人から意見を聞く際にはアンケートもするべきで、大人全体としてではなく学校職員、事業者など属性ごとの検証ができるようになるとうい。

- 単年度の評価・検証にあたっては、豊島区の例が参考になる。また、その他の視点として、その年にできなかったことについて、改善の方向性が明確になるとよいのではないか。
- 条例に基づいて取組が行われているか、条例の理念がきちんと理解されているかが意識されているべきである。
- 例えば子どもの居場所づくりでは、ある地域で居場所づくりが行われていても、区全体で見ると成果が薄れてしまうようなことが考えられるので、地域ごとの成果が見える検証をすることも一つの視点なのではないか。
- 委員会が次期に引き継がれ、様々な人が入れ替わっていく中でも子どもの権利の視点が引き継がれていくような評価の仕組みを作る必要がある。